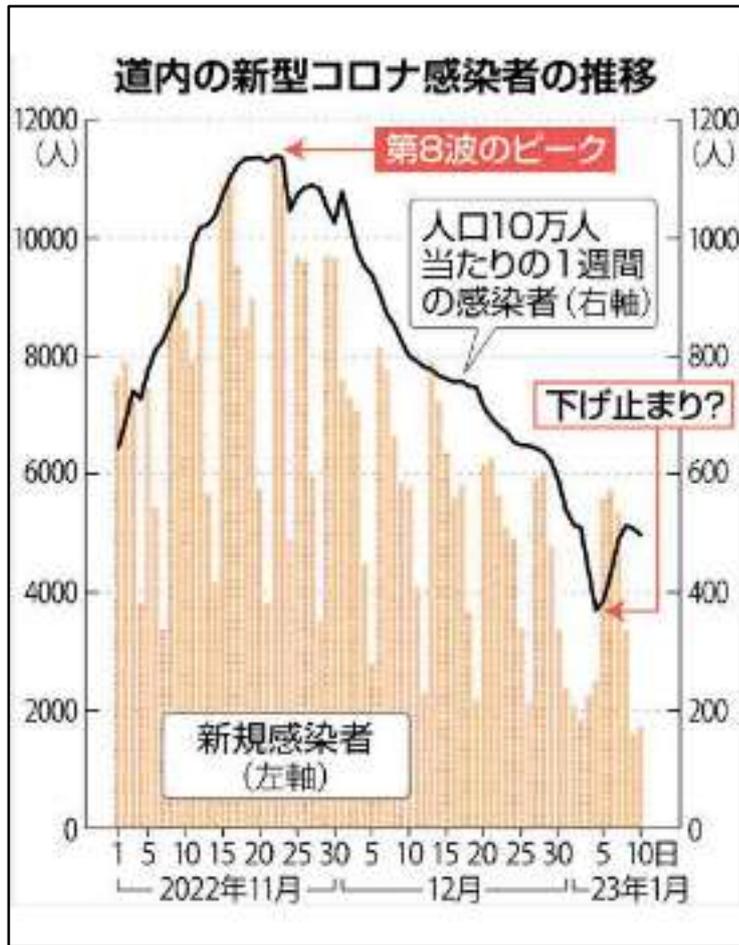


インフル同時流行現実味 道内コロナ 年明け以降感染増、懸念強まる

1/10 北海道新聞



道内は年明け以降、新型コロナウイルスが再拡大する懸念が強まっている。人口10万人当たりの直近1週間の感染者数と日別の新規感染者数が5日ごろから上昇傾向を見せ始めた。7～9日の3連休に各地で成人式が行われるなど人の動きが活発化し感染状況が悪化する可能性に加え、季節性インフルエンザとの同時流行で外来を中心に医療が逼迫（ひっばく）する恐れも出ている。

道内の人口10万人当たりの感染者数は流行「第8波」で爆発的に増え、昨年11月下旬に1100人超とピークに達した。その後は減少に向かい今月4日に369.6人まで低下したが、5日以降は緩やかに増加し10日時点で497.8人。

昨年11月22日に1万1394人と最多を更新した新規感染者数も

今月10日は2千人を切り2日連続で前週の同じ曜日を下回った。ただ、ここ数日の減少は3連休で検査数が減った影響による一時的なものと考えられ、再び増える懸念がある。

道内ではこれまでも年末年始後に感染者が増加。昨年1月は日別の感染者数が7日まで100人以下だったが、成人式関連のクラスター（感染者集団）などオミクロン株が拡大し、19日には初めて千人を超えた。道の佐賀井祐一新型コロナウイルス感染症対策監は「今後、感染者が減るとは考えにくい」と話し、換気などの感染対策やワクチン接種の検討を呼びかける。

昨年12月上旬に57.9%まで上昇した病床使用率は今月10日現在37.6%。一方、道内ではインフルエンザの流行も始まり、1定点医療機関の患者数は1日時点で2.76人と前週比1.6倍だった。コロナとインフル患者が共に増えれば外来を中心に医療の負担は増す。札幌医科大学の秋原志穂教授（感染看護学）は「コロナ病床使用率などの数値に表れなくても実際の医療現場が逼迫している状況も考えられる」と指摘する。

従来株より免疫回避力などが強いとされる新たな変異株も懸念材料だ。東京都ではオミクロン株派生型「BQ.1.1」が増加傾向で、米国では「XBB.1.5」が拡大。秋原教授はXBB.1.5が道内未確認であることを踏まえ「今後、急拡大する恐れもある。会話をする場合にはマスクを着用するなどの対策をいま一度徹底してほしい」と訴える。（田鍋里奈）